

を見てまわったが見あたらない。

引き揚げの日、集結場所の東本願寺に集まった。台湾人の共学生（学級に二、三人いた）が見送りにきてくれた。基隆港よりリバティに乗船した。

同僚で後輩の潮地さん（故人）一族も一緒であった。私は妊娠三か月であったので、日本への旅、一週間あまり気分がすぐれなかったが、和歌山県田辺港に入港した。

親戚は東京都内に多かったが、いずれも戦争のため近県に疎開していた。義母と義弟（昭和二十年十月、八王子空襲で殉職死亡）の待つ東京芝浦電気株式会社小向工場の社宅、悟雲荘に落ちついた。主人はすぐに東芝小向工場総務課に勤めさせてもらうことができて、いちおう生活は安定したが、妊娠中に私に出る栄養品（バターやチーズ）などもすべて切符制で、しかも行列買いであった。会社では、土曜日は買い出し休暇としてくれたので、毎週主人は、埼玉県の羽生付近まで食料品の買い出しに行った。しかし、義弟も死亡していることであり、いつまでも東京小向工場社宅にいるわけにもいかないので、私が以前三井物産台北支店に勤めていた関係で、主人は

東京中央区の三井物産機械部月島工場（自動車修理工場従業員数百人）の庶務課につとめ、その構内にある社宅に住むことができた。土曜日は買い出し休暇日であったので、主人は近県に食料品の買い出しに大わらわであった。昭和二十一年十一月に長女が月島工場内で誕生した。

私の戦争体験記

沖繩県 牧野 清

発病・召集・入院闘病生活の記

昭和十六年十二月八日、日本海軍は真珠湾を攻撃。日米開戦。この翌日私の父強義は死んだ。享年七十九歳であった。当時私は、業務を開始したばかりの台湾石炭統制株式会社勤務していた。

昭和六年二十二歳で渡台した。この地に自らの新しい人生を築くためであった。就職難の時代ではあったが、幸いに台湾総督府殖産局商工課に採用され、夜学で勉強、翌昭和七年五月文官普通試験に合格、昭和十四年任官し

た。昭和十六年日米風雲急を告げつつあった八月退官、半官半民の石炭統制株式会社に抜擢入社、創業事務に日夜努力していた。会社は戦時対応を目標に、台湾全島の石炭を一手に買入れ、販売、統制を目的として、急速新設された会社であった。

その日夜の創業事務に没頭しているころであったので、父の訃報に接しても、責任上どうしても帰るわけにはいかず、弔電を打って葬式の日だけ家で謹慎した。

徹夜勤務が何回もあって、昭和十七年の春ごろから既に体に変調が起こっていたようである。しかしそれが胸部疾患とはまったく気がつかず、運動不足とばかり思っている間に目にみえて痩せ、著しく体力が減退した。しかし私はどんなに苦しくても絶対に休むということをしなかった。いや、休むことはできなかったのである。会社は戦局の推移とともに台湾島内だけでなく、フィリッピンの石炭統制業務も担当することとなって、その職員派遣業務は日夜相次いで、緊急処理を必要とした。

とくに外務省への手続上写真が必要であるが、市内の写真屋に頼むと早くても一週間はかかり、到底急場の間

に合わない。私は会社でフィルムを買ってもらい、自分のサミアーストの中古カメラで、一メートルの距離から次々と、時には十人ほど派遣職員の半身像を撮り、三日で仕上げて手続きのスピード化を図った。派遣手続きは半年ほど多忙をきわめたが、このときほど台湾総督府時代学んだ写真の技術が、大きく役に立った時ではなかった。会社の上司からも非常に感謝された。しかし私の体は次第に衰えていくばかりであった。

その病状としては微熱、食欲不振、体重急減、全身倦怠、寝汗、軽い咳などであった。

昭和十七年の一月、第一乙種、第二補充兵、三十三歳の私にも赤紙の召集令状がきた。

一瞬、自らの体を見て愕然とした。急ぎ西門町の吉田内科医院を訪れ、初めて吉田先生の診察を受けたところ、「君は右肺上葉浸潤だ」といわれ二度びっくり。「召集を受けているのです。なんとかありませんか」と縋るようをお願いしたが、言下に「いや、君は当分安静療養が絶対に必要だ」と宣告され、この急場をどう対処すべきか迷いに迷った。

ああ万事休す。この体ではもはや国家の急に役立たず、この時ほど自分を情なく、身の不甲斐なさを悲しんだことはなかった。

応召の壮行会は、会社でも数人の職員とともに、また東門町会でも型通り行われ、歓呼の人波にもまれながら、心は侘びしく台北第三連隊に応召入営したが、台北帝国大学医学部附属医院長河石九二夫先生の、「肺結核―向後六カ月間安静加療ヲ要す」旨の診断書を提出し、軍医の診察も受けて即日帰郷と決定、翌朝台北医院傳染病棟に入院し、小田内科に属した。

その頃は連日応召者を送るざわめきが病室の中にもきこえた。即日帰郷して入院した私は、自分を顧みて終始恥ずかしい思いに明けられる毎日であった。

入院中某内科では檜油注射による試験を、小田内科では台湾の蛮地に自生する「たまさきつづらふじ」という草から抽出精製した「セラフワンチン」という物質による治療をそれぞれ試験しているといわれていた。結核特效薬の開発に懸命に努力しており、われわれはその成功を祈っていたが、結局は効果なく、不成功に終わっ

たという噂が伝えられていた。

入院中の闘病生活は、結局大気、安静、栄養の三原則により実施されていたように思う。しかし毎日のように死亡者があり、遺族の泣き叫ぶ声が悲しく、痛ましく、そして我々の運命を予告するかのように心細く感ぜられた。私は入院直後、急坂を下るように一時は随分と悪化したが、安静療養でもち直し次第に体重も血沈も回復して、入院六か月で退院した。体重は五十キロ位であったと思ふ。

退院後は自宅療養九か月。あちらこちらの空襲情報が傳えられ、隣組では防空、防火訓練、燈火管制なども行われ、騒然たる戦時生活のさなかである。私は退院後は毎月一回黙呼に呼び出され、手榴弾の投てきなどをさせられたが、他の人々の半分位も投げ得なかった。

しかし結局一年三か月で再び原職に復職することができた。会社はこの期間を公傷休職扱いとし、給与の一切を支給してくれたことは有難いことであった。

台北大空襲の記

昭和二十年五月三十一日。この日は朝からよく晴れ上

がっていた。午前十一時ころ突如空襲警報が鳴りひびき、間もなく俤形五機編隊のB 29による、爆弾投下が開始され、日本空軍機の迎撃や地上砲火の応戦もないままに、午後一時過ぎまで実に二時間余にわたり、いれかわり立ちかわり、思うままに爆弾の雨を降らせた。その延べ機数は実に数百機にも及ぶかと思われた。台北市はこのじゅうたん爆撃によって、一瞬にして市街の大部分が塵燼に帰してしまったのであった。

私は当時西門町の台湾石炭統制株式会社の庶務課に執務中であつた。空襲警報とともに三階事務室から地上防空壕に入った。多川社長をはじめ、各部長、課長等が既に入っていた。空襲の止むのを待ったがなかなか止まない。会社の近くにもしばしば爆弾は落下し、物すごい地響きとともに、熱い爆風も傳わり、時には爆弾の破片が壕の入口に飛んでくることもあつた。

空にはごうごうたるB 29の爆音が耳を聳し、その中に投下爆弾が大気を切つて落下してくる。あのザザーという絹を引裂くような不気味な鋭い音が、幾つも幾つも重なってきこえた。我々は誰も言葉を出さず、おしだまっ

て、ただ頭上に爆弾が落下してくれないよう神仏に祈るだけであつた。まったく生きた心地もしない地獄の中の時間であつた。

午後一時頃になつて爆撃はようやく止み、空襲警報も解除となつた。私は急ぎ机上の書類を片付け、幸町の庶務課疎開先（檜橋庶務課長宅）へ行くために、城内京町經由予定で自転車に乗り会社を後にした。ところが踏切附近まで来たとき、またまた空襲警報。爆音も聞こえる。仰いでみると、はるか大稲握上空から次第に降下しつつあるようである。さあ大変とつきに判断、もはや会社にもどる余裕はない。ただちに近い西門町派出所の防空壕に急行、自転車を倒してとびこんだ瞬間、至近距離に爆弾が落下して轟然と炸裂、実に一瞬、間髪の違いで命拾いをしたことを知つた。

あの時もし私が附近の路上にまごまごしていたら、鋼鉄のような爆風、あるいは破片のために即死していたことは間違いないのである。運命の神は病氣から辛くも生き返ってきた私を、再び助けて頂いたと私は神に感謝した。

終戦・留用の記

昭和二十年八月十五日。あの台北大陸大空襲から二か月半後のこの日終戦となった。陛下の玉音放送は、幸町庶務課疎開先の防空壕内で、同じ課の山口春江さんと共に聞いた。一瞬、信じ難い、そして悲しい、空しい感じであったが、「ああ戦争が終わった」と、正直のところほっとした複雑な気持ちであった。

敗戦によって今まで統治者であった日本人はその地位から転落し、治者と被治者の立場が逆転して台湾本省人との間にいろいろのトラブルが噴出した。会社でも厳しい檣橋庶務課長に対する反感から、台湾人職員が集団でなぐり倒すという事件が起こった。

中等学校や高等学校でも、台湾人の生徒集団が日本人先生を殴るといふ事件が続発しているという噂がしきりであった。日本人刑事を老鰻（ローマ・台湾人のやくざ）が追い回しているという、不穏な話などもあった。統治の中心権力がその力を失ってしまつて、騒然たる無秩序の社会となつてしまつたという不安感は一しひしと身に迫る思いであった。

一方街頭では、台湾を引揚げて本土に帰るので、日本人のほとんどが大通りの路上に家財道具を並べて、これを投げ売りしていた。私自身もやった。台湾本省人や、進駐した中国軍人や官吏などが買い手で、物を返すときは投げて返していた。

石炭統制会社は中国政府によって接収され、台湾省石炭調整委員会という政府機関の一部局となった。私は日籍の一人として、堂々一緒に仕事をしてくれと要請され、留用者となった。私は庶務、人事面のことを担当した。「担当した」といっても、それは顧問的な存在であつて、事務の実体は中国人、本省人が握っていた。しかし私は筆文字が少し書けるということで、埜道（ギドウホウ）という職員（中国人書家）とたちまち朋友となり、彼を家に招待夕食をともしたこともあった。彼は私ども夫婦を中国製作の映画に招待したりした。

私は当初は中国人とは筆談の会話であつた。この時は漢文のわずかの知識が大いに役立った。しかし半年くらい後では、片言の中国語で会話も可能となり、彼等は生活は必ず保障するから台湾に残るよう、しきりに希望し

ていた。そしてある日月給が一挙に三十数倍になったことを告げられ、びっくり仰天した。

しかし台湾の社会は日々に物価は高くなり、なんとなく騒然として治安面の心配もあり、彼等の希望どおり台湾に留まるわけにはいかず、帰心は矢の如く、日々につるばかりであった。

台湾を引揚げるの記

昭和二十一年の夏ごろから、当時在台中の八重山郷友の間には引揚げ問題が話題となりつつあった。しかしそのころには、八重山に対してはすでに第一次、二次と二回にわたり引揚船が引揚者を運んでおり、一応すんだ形となっていたが、台湾全島では、なお相当の数の八重山出身者が残っていた。

某日。台北市泉町鉄道部官舎大浜孫位氏宅に大浜方一（鉄道部）石野長正（々々上）佐々木勝五（々々上）石堂博一（通信部）牧野清（台湾省石炭調整委員会）等が集合し引揚げ問題をどうするかで話し合った。その結果、ともかくどうしても帰らなければならぬ、必要な準備を進めるべきだという結論に達し、台湾総督府にいて顔がい

くらか広いという理由で、私が諸事折衝推進に当たることとなった。

私どもは当時、これまで延期されてきた沖繩本島への引揚げ業務が、大規模な計画で進められつつあるので、その中の一船を八重山に帰船してもらおうということに目標をしぼり、運動を展開することとなった。運動の過程では台湾沖繩同郷会連合会長と俄喜宣先生、役員平川先次郎先生、同川平朝伸先生、同南風原朝保先生等の多大なご指導、ご協力を煩わした。

かくて紆余曲折の末、十一月の初旬ころ辛くも実現の報をうけたときは、本当に天にも昇るほどの喜びであった。十一月十四日台北地方の引揚者は、空襲で半ばこわれている旧台湾総督府庁舎に集結した。

十一月三十日私共は基隆岸壁の集中営に移動した。連日の霖雨、北風が吹き荒れて港内もしけており、岸壁につながれている日本軍用船の残骸が、ギョーッ、ギョーッと絶えず無気味な音を立て、夜半の夢も安らかでなかった。八重山の吉野支庁長への連絡文書は、私は既に数通もヤミ船に託して発送しているが、十二月十四日基隆出港、

十五日朝石垣入港という実行スケジュールは、出迎え後準備の都合もあり、またLST十八号船長からの要請もあって、どうしても電報を打って連絡する必要があった。しかし当時は一般の電報は正常化しておらず、郵便局も海岸局なども当たってみただけでもまったくダメで、この点ほとんど困ってしまった。

このとき藤田敏侯（後・豊久）、臨照間用茶、両君から「天気予報の尻に、我々の電文をつけ加えて、気象台から放送させるという方法はどうか」という、奇想天外のアイデアが提案された。郵便局時代の友人（台湾人）もいるというのである。はたしてこんなことが可能かどうか、はなはだ疑問であるが、万策つき果てている今日、わらでもつかむ思いで「よし、やってみよう」と、決意、石垣長正総隊長、牧野清副総隊長それに藤田、臨照間両君が加わって、四人でその台北気象台を訪問、台湾人の友人という廖氏に会って窮状を訴え、中央気象台宛として、「八重山支庁長に御連絡をう。米船にて台湾引揚民一〇〇〇人、荷物二五〇〇個、十二月十五日朝石垣島港に着く。上陸及び荷役の御手配頼む。右石垣島測

候所に御連絡願う」という連絡文を天気予報の末尾に加えて放送してほしい。これを中央気象台がうけて石垣島測候所に連絡し、測候所から八重山支庁に周知するというにしたいというのが我々の切なる希望であると協力をお願いした。十二月五日ごろのことであった。我々はこの窮通の一策が是非成功してくれるよう、ただ神に祈るのみであった。

我々は十二月十三日乗船、翌十四日午後二時基隆港解纜、十五日午前六時石垣港入港、支庁海軍課のはしけが出迎えにきてくれた。このはしけで気象台を通ずる我々からの一連の連絡事項が、奇跡的に八重山支庁に届いていることを知り、台湾の廖氏の友情と中央気象台のご配慮に対し、衷心より有難く感謝した。

なつかしい旅我々の山並みにかかる朝雲が、あかあかとあかねに燃えて、我々を歓迎してくれているようであった。私は引揚げの途中幸いに微熱もおさまり、なんとか無事に再び故郷の地を踏むことができた。